

# 歴史書と「歴史」の成立

## —『西南記伝』の再検討— (1)

大 谷 正

### 目 次

はじめに

第1章 『西南記伝』以前の西南戦争像

- 1) さまざまな戦争報道—台湾出兵と西南戦争—
- 2) 西南戦争に関する官庁側の史料と戦記

第2章 『西南記伝』の形成過程と内容

- 1) 『西南記伝』の著者紫山川崎三郎 (以上、本号)
- 2) 博文館版『西南戦史』と黒龍会版『西南記伝』
- 3) 黒龍会版『西南記伝』の世界観

第3章 『西南記伝』以後

おわりに

### はじめに

留まることなく流れつづける無数の時間の流れのなかで発生した様々な事象が、ある枠組みを持った歴史的事件としてひとつひとつに認識される過程で、歴史を研究する歴史家と歴史家によって叙述された歴史書が果たす役割は小さくない。もちろん、ひとつひとつの歴史認識に影響を与えるのは歴史書だけではないし、また歴史書は歴史家以外の様々なひとつひとつによっても書かれることは言うまでもない。それでも歴史家は法律家などと並んで最も古く成立したアカデミックな職業である。時代と場所によってその影響力に差があるが、現代の日本のような歴史学に人気がない時代でも、なにがしかの影響力が残っているように思われる。本稿では、明治末年に出版された「西南戦争」の歴史を描いた『西南記伝』が、その後のひとつひとつの

「西南戦争」に関する理解を形づくり、現在でさえ、教科書や研究書の西南戦争像は意図するにせよ、しないにせよ、『西南記伝』の枠組みに影響を受けているのではないか、という問題意識から出発して、歴史書と「歴史」認識の関連について考える。

『西南記伝』は内田良平<sup>1)</sup>が1901年に設立し、主宰した黒龍会によって、1909年から1911年にかけて発行された。菊版全6冊で、各巻は本文と付録を合わせると各々800頁以上、最も分厚い最終巻の「下巻二」に至っては1060頁に達する。合計頁数は5000頁を超え、本文は1行38字で15行組み（1頁に570字、400字詰め原稿用紙で1.425枚）が基本なので、単純計算でも400字詰め原稿用紙で優に7000枚を超え、しかも細字で組まれた史料や2段組の部分も多いので、実際はさらに膨大なものとなる。この書物は戦前期に刊行された最も大部かつ代表的な西南戦争の研究書であり、戦後もこれを超えるものはないし、そもそも本格的に西南戦争を総合的に研究した書物は出版されていないと思われる。

右翼結社が、日韓併合の時期、自分たちの主張の正当性を世に問うために出版した本書は、戦後は批判的に評価されることが多かった。しかし、史料の蒐集に力を入れ、史料の選択も優れていたために、現在でも西南戦争について言及する際に使用されつづけ、結果的に歴史家の西南戦争叙述の枠組みを縛りつづけているのである。本稿は、まず第1章で西南戦争の最中の戦争報道と、その直後の西南戦争叙述について検討する。つづいて第2章では『西南記伝』の成立の経緯と叙述の特徴を、実質的な著者である紫山川崎三郎（1864年～1943年）を中心に考察する。さらに、『西南記伝』のその後については、第3章で考える。なお、本稿は図表を多用したこともあっていざずらに紙数が増え、2回に分載せざるを得なくなり、本号には2章1節『『西南記伝』の著者紫山川崎三郎』までを掲載し、残りは次号以降に掲載する予定である。

## 第1章 『西南記伝』以前の西南戦争像

「西南戦争」とは何か、その時間的な範囲をどのように理解すべきかということ、本稿の主題であり結論に関係するので、最初に著者の考えを示すことはできないが、手元にあった『角川新版日本史事典』（角川書店、1996年）の記述は次のようである。

西郷隆盛など旧薩摩藩の士族を中心とする反政府暴動。1873(明治6) 征韓論の敗北により西郷等は下野、私学校を中心に子弟を養成し、鹿児島には士族の支配体制が続いた。政府の開明的諸政策や士族解体策に反対しておきた一連の士族反乱の後、77, 2月、西郷は私学校の生徒に擁立されて熊本鎮台を攻撃した。明治政府はただちに徴兵令による軍隊を派遣して鎮圧にあたらせ、9月24日西郷軍の指導者は戦死または自刃した。これは保守士族派の最後の抵抗で、以後の反政府運動は自由民権運動によって展開された。(587頁)

この辞書の記述の根拠になった西南戦争の定義つまり征韓論争と征韓派参議の敗北を起点とし、西南戦争におけるかつて倒幕派主力であった薩摩軍の敗北と自由民権運動のブルジョア民主主義運動としての再出発を終点とする一は、第二次大戦直後の明治維新研究の潮流を反映した、標準的でやや保守的なものである。その典型的な記述は、岩波全書の1冊として刊行された画期的な概説書である遠山茂樹『明治維新』（初版は1951年2月発行）の「第5章 明治維新の終幕」に見られる。すなわち、「歴史的画期としての明治維新は、天保十二（一八四一）年の幕政改革に始まり、明治十（一八七七）年の西南の役をもって終わる、三七年間の絶対主義形成の過程である」<sup>2</sup>、これが遠山の明治維新概念であり、そのなかで西南戦争は士族派民権運動の最後の高まり、同時に維新の終末として位置づけられ、戦争の起点が1873年の征韓論争（明治寡頭支配の分裂）から説明され

た。

しかし、上記のような広い歴史認識の中に西南戦争を位置づける見方は、西南戦争時点やその直後には一般的ではなく、1877年2月15日の薩摩軍の出兵開始から同年9月24日の城山陥落・西郷一党の自刃・降伏までの一連の戦闘そのものを西南戦争と考え、事件の範囲を広くとる場合でも、政府による鹿児島弾薬庫からの弾薬搬出計画、私学校生徒の弾薬庫襲撃・弾薬奪取事件からはじめる程度であった。つづいて本稿では、西南戦争のリアルタイムの伝えられ方を最初に紹介しよう。

### 1) さまざまな戦争報道—台湾出兵と西南戦争—

#### 新聞と「報道」の成立—大新聞と小新聞—

新聞史の通史的叙述には、西南戦争は「ニュースに対する民衆の欲求をかり立て、新聞史の売れ行きが目に見えて増大した」<sup>3</sup>、というような叙述がある。いまいちど近代日本語新聞の発生から西南戦争までの歴史を辿るとつぎのようである。

日本語日刊新聞の誕生は1871年4月の『横浜毎日新聞』とされ、翌年1872年には『東京日日新聞』、『日新真事誌』、『郵便報知新聞』が続々創刊された。当初、新聞は現在と違う横長の紙を使用し、本木昌造の金属活字を使用した『横浜毎日新聞』以外は、木版や木活字で印刷されていたが、1872年から1873年にかけてほとんどの新聞に鉛活字が導入され、縦長の紙面に変化し、近代新聞の体裁を取るようになった。

近代的な日本語新聞がおこなった最初の戦争報道は1874年の「台湾征討」であろう。この事件は、大久保利通と大隈重信が、西郷隆盛の弟の西郷従道を台湾蕃地事務都督に任じ、熊本鎮台兵と鹿児島士の土族兵からなる3000人を超える遠征軍を台湾に送ったものであった<sup>4</sup>。遠征軍には2名の新聞特派員が同行した。一人がニューヨーク・ヘラルド新聞の通信員ハウス (Edward Hawerd House)<sup>5</sup>であり、もう一人が日本人初めての従軍記者

となった『東京日日新聞』特派員の岸田吟香であった。クリミア戦争がイギリスにおいて War Correspondent を生んだと同様に、台湾出兵は日本で近代的・西欧的な戦争通信員を生んだ戦争だった。

確かに岸田吟香は事件の現場に赴き、記事を送ったが、すぐさまこのような「報道」のスタイルが一般化したとは断言できない。『東京日日新聞』に連載された岸田の「台湾信報」シリーズのいくつかの挿話は錦絵新聞(「明治の新メディアである新聞と旧メディアである浮世絵が結びついた一枚刷りの多色摺り版画」と、吉見俊哉・土屋礼子監修『図録・明治のメディア師たち—錦絵新聞の世界—』日本新聞博物館、2001年は定義している)として民衆世界に伝えられた。日本新聞博物館所蔵の錦絵新聞中、吟香の台湾従軍記事に関連するものとして、726号(1874年10月、台湾牡丹社少女和服を着せられる)、736号(9月、大男の岸田吟香を背負う台湾土人)、752号(10月、台湾牡丹社の土人が帰順する)、849号(?月、日章旗を飾り清国との和議を祝う)、851号(?月、台湾で戦死した義弟の幽霊)の5点が現存する。これらが台湾出兵に従軍した岸田吟香の報道を元にした錦絵新聞のすべてではないかも知れないが、それにしても752号を除くと、取り上げられているテーマは近代的「報道」の中心線とはやはずれた、昔からあった挿話・笑話・伝奇の類である。受け手の側の民衆の嗜好と吟香の「報道」がずれており、錦絵新聞を制作する側は民衆の嗜好に合わせた結果、このような記事の選択になったとも考えられる。

これらの錦絵新聞の文章作者は「転々堂主人」あるいは「吟翁カ同社の親友転々堂藍泉」とあるので、高島藍泉(本名瓶三郎、幕府御茶坊主衆の出身、1838-1885)であり、絵を描いたのは一蕙齋芳幾よしいく、すなわち落合芳幾(本名幾次郎、浮世絵師歌川国芳の門下、1833-1904)であった。新しい西欧起源のニューメディアである新聞に掲載された従軍記者吟香の「報道」スタイルの記事は、民衆世界の興味関心に合うよう物語化されて、浮世絵師が介在して、一枚刷り多色刷り版画という伝統的メディアの形式

表1 1876年から1878年の東京の年間新聞発行数

	1876年	1877年	1878年
読売新聞	4,352,554	6,189,674	6,544,679
東京日日新聞	2,993,998	3,422,792	2,125,292
仮名読新聞	231,533	2,771,250	1,560,000
郵便報知新聞	2,143,293	2,070,509	2,119,061
朝野新聞	1,178,699	2,058,764	2,026,492
東京曙新聞	814,976	1,933,257	2,354,973
東京絵入新聞	1,030,488	1,872,000	2,400,000

(山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局, 1981年所載の別表1を簡略化)

に押し込まれ、絵草紙屋で販売された。

他方で錦絵を描いた落合芳幾は、福地源一郎(旧幕臣・ジャーナリスト)、西田伝助、條野伝平(2人とも出版・貸本業)とともに、<sup>おおしんぶん</sup>大新聞である『東京日日新聞』の創刊に参加した人物であった。それまで日本に存在しなかった新聞経営者、新聞記者という職種は、絵師・戯作者・貸本屋・出版元という在来の人材から供給され、ニューメディアと様々な旧メディアは人的にも技術的にも根っこでつながっていたのである<sup>6</sup>。

台湾遠征から3年を経た西南戦争の時点でも、新聞という新メディアが一層発展したにもかかわらず、伝統的メディアの残存と新メディアとの融合という状態が見られた。議論の前提として、最初に当時の新メディアである新聞の発行状況を数字で押さえておこう。1876年から1878年の東京の年間新聞発行数を上位から並べるたものが表1である。

新聞の年間発行数を約300日(当時は週1日休刊の新聞が多い)とすると、1877年を例に取ると、発行部数最多の読売が1日に2万部強、第2位の東京日日が1万1000部、第3位の仮名読が9000部、それ以下は6000部台であった。表中の太字ゴシック体で示した、読売・仮名読・東京絵入の3紙が<sup>こしんぶん</sup>小新聞(判型が小さく、風俗ネタ中心、絵入りで振り仮名付き)、そのほかが東京4大新聞と称された<sup>おおしんぶん</sup>大新聞(判型が大きく、政治・経済・外

交中心、漢文読下し体で振り仮名なし）である。大新聞4紙の1日当たり発行部数が約3万部、これに対して小新聞3紙の合計は約3万5000部で、発行部数で小新聞が大新聞を凌駕していることに留意していただきたい。この意味について後述することにして、まず最初に大新聞の戦争報道の特徴を確認する。

およそ3年前の台湾出兵時点で岸田吟香という従軍記者が誕生し、戦争報道の一つのスタイルができあがったにもかかわらず、すべての大新聞がそのスタイルを採用したわけではないし、個々の新聞記者レベルでも現場に行き、戦闘を体験し、それを速報するという報道スタイルが理解されていないことがあった。

『東京日日新聞』は福地源一郎（社長兼記者）を派遣した。福地は戦争勃発の報を聞くとすぐさま東京を発ち、京都経由で博多に上陸し、伊藤博文と山県有朋に頼んで、従軍許可を得ただけでなく、さらに軍団御用掛に任命してもらい、公務に従うという名目で前線を「探訪」することができた。その成果が同紙に3月から掲載された「戦時採録」シリーズで、福地は現在の従軍記者と同様の行動を取り、それに基づいて「報道」をおこなった。

『朝野新聞』は福地と並ぶ当時の著名記者成島柳北（局長兼記者）を派遣した。成島は戦地に隣接する九州や熊本には行かず、京都に留まり、西京の春を満喫し、文人墨客との交流をもっぱら記事とした。「西報」シリーズの西南戦争記事も、政府関係の電報や京都市中の噂を紹介するにとどまった。成島の記事は、非「報道」的な、伝統的な言説の様式を堅持したものであった。

『郵便報知新聞』の場合は、矢野文雄と犬養毅の2人の記者を派遣した。そして、矢野は京都にとどまって成島的に行動し、成島の記事を書いた。若い犬養は熊本に向かい、福地的な「報道」活動を展開した。同一新聞の派遣した記者でさえも、新しい「報道」的な記事を書く者と、伝統的かつ

非「報道」な言説を維持しようとする者とに分裂していた<sup>7</sup>。近代的・西欧起源の「新聞」の日本における正当な嫡出子である大新聞でさえ、戦争報道に関して近代的・西欧的「報道」言説と非「報道」的で伝統的な言説とが混在していた。

これに対して大新聞を発行部数では凌駕していた小新聞の側はどのような報道をしたのだろうか。この時期、小新聞が錦絵新聞の読者層を喰って、それを駆逐し、発展していくという指摘が一般的なので、小新聞がどのような戦争報道をおこなったのか興味があるが、残念ながら直接参考のできる成果を発見することができなかった<sup>8</sup>。そこで観点を変えて、新聞ではなく冊子本の形で、同時代に戦争を報道した一群の出版物に注目したい。

### 冊子体の和書が伝える戦争

国会図書館所蔵の和本を、西南戦争の年とその翌年(1877-1878)と「鹿児島」というキーワードを入れて検索した結果、「表2 国会図書館所蔵本〔鹿児島+1877-1878〕で検索結果」のようなデータを得た。「鹿児島」のかわりに、「西南」「西郷」「丁丑」などのキーワードを入れても類似のデータが得られるが、データ数の一番多い「鹿児島」を例に検討する。

まず、ここに55点のデータがあるが、明らかに同一の本や書名の表記がわずかに違っているものがあって、実数は少なくなる。また、著者名に注目すると、同じ著者が、ほぼ同じ内容を少しずつ書名を変えて書いている場合がある。著者と発行・発売元との関係を見ていると、発行・発売元が、他所で発行したものを再度発行した例があるようだ。著作権が確立していなかったため、無断で海賊版や簡略化された版が出た場合や、著者が他所の発行・発売元に持ち込んでいる例もあるかも知れない。これらの著書の過半は国立国会図書館デジタルライブラリーで閲覧でき、そうでないものはマイクロフィルムに撮影されたものを閲覧することになる。

表2の中で、最も多くの著作があがっている篠田仙果(久次郎・久治郎)

表2 国会図書館所蔵本〔鹿児島十1877-1878〕で検索結果

著書名	著者	発行・発売元	発行年月
1. 絵本鹿児島戦争記	篠田仙果	山村金三郎	明10.10
2. 鹿児島英名伝	竹内栄久	辻徳兵衛	明11.2
3. 鹿児島英雄銘々伝. 初-4号	西野古海	木村文三郎	明10
4. 鹿児島記事	樋口徳造	又新舎	明10.2
5. 鹿児島紀事	村井静馬	綱島亀吉	明10.4
6. 鹿児島紀事	村井静馬	綱島亀吉	明10.11
7. 鹿児島記聞. 第1-5号	沼尻絰一郎	若栄堂	明10
8. 鹿児島口説	石川和助	石川和助	明11.2
9. 鹿児島軍記. 初-4編	細島情三[他]	松村甚兵衛	明10.9
10. 鹿児島軍記. 第4-16号	大西庄之助	大西庄之助	明10
11. 鹿児島軍記	大西庄之介	大西庄之介	明10
12. 鹿児島県賊徒戦死姓名録	嘉悦喜多八	嘉悦喜多八	明10.12
13. 鹿児島実記一夕話	山崎徳三郎	大倉孫兵衛	明10.12
14. 鹿児島実戦記. 第1-7号	蜂須賀国明	林吉蔵	明11.1
15. 鹿児島実録. 第1-4号	森本順三郎	森本順三郎	明10.7
16. 鹿児島征記	西野古海	木村文三郎	明10
17. 鹿児島征討記. 第1-16号	竹内栄久	荒川藤兵衛	明10
18. 鹿児島征討記. 初集	羽田富治郎[他]	小玉弥七	明10.6
19. 鹿児島征討記	守川音次郎	綱島亀吉	明10.11
20. 鹿児島征討実記	飯田定一	錦寿堂	明10-12
21. 鹿児島征討全記. 第1-8, 15-26	井沢菊太郎	井沢菊太郎	明10
22. 鹿児島征討日記	西村兼文	西村兼文	明10
23. 鹿児島征討日記	馬場文英	本城小兵衛等	明11.7
24. 鹿児島征討録	川口宗昌	甘泉堂[ほか]	明10
25. 鹿児島征伐物語. 2-5編	篠田久次郎	長谷社	明10.3
26. 鹿児島戦記. 後編	永島福太郎	青盛堂	明10
27. 鹿児島戦記	岩崎茂実	山中市兵衛	明10.9
28. 鹿児島戦記	篠田久次郎	堤兵衛	明10.2
29. 鹿児島戦争記. 第1-6号	永島辰五郎	宮田伊助	明10.4
30. 鹿児島戦争記	篠田久次郎	杉浦朝次郎	明10
31. 鹿児島戦争記	羽田富治郎	児玉弥七	明10
32. 鹿児島戦争記	樋口徳造	又新舎	明10.2
33. 鹿児島戦争軍記	津田鎗蔵	佐野金之助	明11.2
34. 鹿児島戦争西郷口説	加藤富三良	加藤富三良	明11.11
35. 鹿児島戦争新誌	篠田久治郎	山松堂	明10.3
36. 鹿児島戦争日記	村井静馬	辻岡文助	明10
37. 鹿児島太平記	篠田仙果	山本平吉	明10
38. 鹿児島太平くとき	吉田小吉	吉田小吉	明10.11
39. 鹿児島大合戦	竹内栄久	杉浦朝次郎	明10.7
40. 鹿児島大激戦記	山崎徳三郎	上村清左衛門	明10.11
41. 鹿児島鎮西戦争記	永島辰五郎	宮田伊助	明10.4
42. 鹿児島追討記	内藤善次郎	内藤善次郎	明10
43. 鹿児島追討記	西野古海	木村文三郎	明10
44. 鹿児島電信	金井徳兵衛	金井徳兵衛	明10.4

45. 鹿児島伝報記. 1, 2号	竹内栄久	上坂久次郎	明10.5
46. 鹿児島電報記. 第1-4号	長尾勝四郎	長尾勝四郎	明10
47. 鹿児島伝報記	伊藤静斎	児玉弥七	明10.3
48. 鹿児島伝報記	小野田虎太	内藤伝右衛門	明10
49. 鹿児島伝報録. 第1-4号	樋口繁三郎	樋口繁三郎	明10
50. 鹿児島美勇伝. 第1-3号	大西庄之助	大西庄之助	明10.10
51. 鹿児島暴徒風説録. 初編-3編	篠田久治郎	共楽社	明10.2
52. 鹿児島暴徒風説録. 初編-3編	吉川政興	共楽社	明10
53. 鹿児島余聞	古林栄成	伊東祐太郎	明10.3
54. 西郷隆盛陣没実記	枝岩治郎	栄久堂	明10.11
55. 探誠夢復路. 鹿児島事件の巻	竹内栄久, 沼尻桂一郎	沢久次郎	明10

表3 篠田仙果(久次郎・久治郎)著作の西南戦争実録

書名	発行元	発行日(出版御届)データ	備考
①鹿児島暴徒風説録	共楽社	初編 2/15, 3編 2/23	活字のみ
②鹿児島太平記	山本平吉	1号 2/16, 2号 2/16, 3号 5/4	歌川国政画
③鹿児島戦記	堤吉兵衛	初編 2/26, 2編 2/26, 3編 2/26	歌川芳虎(孟齋)画
④鹿児島戦争記	杉浦朝次郎	初編 3/3 ~ 5編 3/3, 6編 ~ 8編 4/4, 9編 ~ 10編 5/4, 11編 ~ 12編 10/11	小林清親画
⑤鹿児島戦争新誌	山松堂	初編 ~ 3編 合本 3/15	孟齋門人虎重画, 揚州斎周延
⑥鹿児島征伐物語	長谷社	2編 3/7迄戦記す, 3編 4/5迄, 4編 ?, 5編 9/25迄, 御届け 3/15	2編は活字のみ, 3編以下挿絵有り
⑦絵本鹿児島戦争記	山村金三郎	1, 2 合本 10/29	⑤より抜粋

の著作を、発行日(出版御届)月日順に並べたのが、「表3 篠田仙果(久次郎・久治郎)著作の西南戦争実録」である。表中の④『鹿児島戦争記』は、最近『新日本古典文学大系明治編13・明治実録集』(岩波書店, 2007年)に収録されて復刻され、校注者の松本常彦氏の解説「明治実録の二例」(同書603頁~617頁)のなかで篠田仙果自身の経歴と著作活動が紹介され

ている。

それによると、篠田の師は、自称二世柳亭種彦、初代笠亭(柳亭と音通)仙果こと高橋広道であり、篠田は二世笠亭仙果であったが、先師やその先師と較べると明らかに劣り、「水呑百姓」と自己規定せざるをえなかったという。生年は不詳、没年は1884年(明治17)である。彼の著作活動の二つのピークは、幕末の慶應3年(1867)と明治10年(1877)であった。著作の「大半が草双紙かそれに近いもの、『天神絵入講釈』を除けば、軍記・戦記」であり、「軍記・戦記には、必ず下敷きとなる著述や参照すべき記事」あり、それらを「編集・翻案する能力」があれば、書肆の要請に応えることができた、と松本は評している。

松本の評は「文学」的才能を規準としたので篠田の著作活動には低い評価しか与えられなかったが、篠田の著作を、一種の戦争報道、ジャーナリストの活動として見ると、別の評価が可能であろう。西南戦争は1877年1月30日の私学校生徒の火薬庫襲撃が直接の発端となり、2月15日の薩摩軍の鹿児島出発に至る。彼の著作には、風説と新聞雑報を編集したもの(絵がないか、あっても、文章が主で絵が従のもの、篠田の著作では表の①と⑥)と、それを脚色して物語化したものに画家の挿絵を加えた絵草紙スタイル(絵が中心で、戯作者が解説を加える体②, ③, ④, ⑤, ⑦)のもの2種類が存在する。全7種のうち、①『鹿児島暴徒風説録』初編は2月15日に、②『鹿児島太平記』1号は2月16日に出版届けがされており、本格的な絵草紙の体裁を持った③『鹿児島戦記』初編から第3編も2月26日に届けが出されている。後に抜粋し直した⑦を除くと、④から⑥も戦争勃発直後の3月上旬から発行され始めていて、まさに事件の進行と同時に平行しながら刊行されているという点で、これらの冊子体の出版物は、現在の週刊誌にあたるようなジャーナリズムの一類型であったと言える。

③『鹿児島戦記』は表紙に官軍・薩摩軍の指揮官の武者絵風肖像を描き、表紙裏に「篠田仙果録、永島孟齋画、絵本鹿児島戦記、東京青盛堂板」と

図1 『鹿兒島戦記』第2編之上より、「西郷桐野篠原の三將軍議を談す」



あり、奥付には、出版届け、定価（六銭五厘）、編集人篠田、出版人米沢町一丁目七番地堤吉兵衛とある。別な奥付には「東京地本問屋、領国米沢町二丁目、加賀屋吉兵衛」とあり、加賀屋とは堤吉兵衛のことであることが分かる。篠田は「明治十年三月」付けの第3編の緒言で、この書の成り立ちを説明する。

今般鹿兒島に事発るや都鄙の老若男女を云ず、耳を側立唾を吞、その  
 頭末如何を待てり、其機を察して加賀屋の主人が童幼にも解し易  
 きやう綴れとの注文に、内国新聞数十種より抜章して数巻となしぬ、  
 さばれ速を旨となし僅一夜に編纏たれば校正の暇もなく、只孟齋か  
 猛なる毫を頼みに書のこと

これから分かるように、篠田が事件報道や風説を「内国新聞数十種より抜章」して短期間に集成し、これに孟齋歌川芳虎が記事を種にした絵を描き、それを加賀屋吉兵衛が絵を中心に据えて周りに記事を散らした絵草子の形として出版した（図1）。情報を入れる器であるメディア・出版の様

式が伝統的なものとなったことで、近代的「報道」を情報源の一つとしつつも、できあがったものは昔風の軍記の世界に近づいていき、登場人物はしばしば見得を切るようなポーズをとった。最近『新日本古典文学大系』に収録された④『鹿児島戦争記』は、事件の発端から収束（城山での西郷の自害）までを扱うが、最終面には「西<sup>さい</sup>か<sup>い</sup>の浪<sup>なみまつた</sup> 全く鎮<sup>おさま</sup>静<sup>りしよ</sup>諸<sup>しょう</sup>将<sup>がい</sup> 凱<sup>か</sup>歌<sup>か</sup>をうたはれ目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>度<sup>た</sup>御<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>を祝<sup>しゆく</sup>したり」との詞書きと、目出度い仕舞の所作が描かれる。戦火が終息し、天下太平に帰す、という軍記物の世界である。

戦争を絵草子の軍記物の世界の枠内で理解した民衆がつぎに求めたものは、戦争・事件に登場した英雄貞女に関する情報であった。篠田自身も後に『明治英名百詠撰』（1879年）を編集しており、そこには多くの薩摩軍諸将とその妻女を登場させている。しかし、西南戦争を伝える連載の軍記ものと英雄貞女伝の関係をよりはっきりと伝えるのは、大西庄之助（東京第一大区十四小区松島町一番地の住人）が編集・出版した『鹿児島軍記』と『鹿児島美勇伝』である。『鹿児島軍記』は全16冊、各々10丁に表裏に表紙をつけた、純然たる絵草子の体裁を取ったものである。両書の奥付にある発行届け一覧によると、1・2号が3月22日、3・4号が4月4日、5～8号が4月27日、9・10号が5月28日、11・12号が6月30日、13・14号が9月6日、15・16号が11月9日にその筋に発行届けが出されている。そして西郷たちが城山で死んだ直後、10月22日付けで『鹿児島美勇伝』全3冊が発行された。『鹿児島軍記』に登場した魅力的な英雄貞女を、戦闘が一段落した段階でピックアップして、列伝体に仕立て上げたものが『鹿児島美勇伝』である。ここでは英雄や貞女たちは、軍記の中に描かれるときのように報道や事実<sup>じじつ</sup>に縛られることなく、芝居絵の役者たちの如く、精一杯の決めポーズを取り、見得を切って人々を魅了する。

大西の場合、軍記においてさえ、官軍・賊軍の呼称を用いながらも、特に薩摩軍を貶めたり、勧善懲悪の図式に押し込めたりする傾向は見られない。まして美勇伝は英雄貞女の物語であるので「賊」という言葉は一切使

図2 『鹿兒島美勇伝』第2号より、篠原国子と三好重臣少将。



われていない。1丁に2人ずつ、つまり1頁に1人が描かれ、見開きに官軍側と薩摩軍側が対になるよう編集されているが、薩摩側が人気があって取り上げる人数が多かったため、後半は薩摩側が並ぶこともあった。篠原国幹の娘と三好重臣少将が対になった頁を紹介したが(図2)、振り袖に襷掛け、長刀を持って立つ面長の美女が篠原国子である。その詞書きには、「篠原国幹の女なり、容うるはしく又孝心なり、父討死と聞より大に愁傷し、せめて一人たり共敵を討て父の靈魂をなぐさめんと、西郷の陣にいたり其次第をのべ候えば、隆盛大いに観賞し、士卒数多随ハせ花岡山に出陣し官軍に抗せしといふ」とあり、親の敵に対する孝女の仇討ちの図式に流し込み、読む人の興味を引きつけた(図1・2とも国会図書館所蔵)。

以上、西南戦争を報道したメディアとして、大新聞、小新聞そして冊子体と書(絵草子に倣ったものが主流)をあげ、大新聞と冊子体絵草子の戦争報道を考察した。両者の中間に位置する小新聞の報道分析が不可欠だが、依拠すべき研究がない現状では、将来の課題とせざるを得なかった。その

結果、下記のような問題点を指摘することができる。

大新聞には記者を現場に派遣し、その見聞に基づいて事実を、断片的に、素早く伝達しようという近代的・西歐的な「報道」言説が次第に浸透しつつあったが、一方で成島柳北や矢野文雄のような著名記者は実際には戦地に赴かず、非「報道」的で伝統的な言説を紙面に提供し続けた。西歐起源の「新聞」の日本における正当な嫡出子である大新聞においてさえ、「報道」言説は徹底していなかった。一方の冊子体和書は、大新聞・小新聞に掲載された報道や風聞を集成し、これに浮世絵師の描く絵画を据え、恰も絵草子の軍記のような物語的な実録の世界を創り上げた。しかも、この実録の世界は、『明治英名百詠撰』や『鹿児島美勇伝』のような英雄貞女伝の世界とも、地下でつながっていた。

つぎに何故、戦争の報道において新聞、とりわけ大新聞が、小新聞や冊子体和書の非「報道」的言説を圧倒できなかったのであろうか。別な言い方をすれば、何故庶民は絵草子の世界を愛したのだろうか。

この問いに対して二つ回答が可能である。一つは、断片的なニュース＝新聞 (newspaper) を毎日読み続け、自分で事件の全体像を構築して理解するという読書習慣を持つ人が少なかったからである。しかし人々は事件に強い関心を抱き (「今般鹿兒島に事発るや都鄙の老若男女を云ず、耳を側立唾を呑、その顛末如何を待てり」)、分かりやすい事件像 (「童幼にも解し易き」) が求められ、これに応えたのが絵草子メディアだった。

さらに、新聞代が物価に対して高価であり、庶民に手の届かない商品だったことが第二の理由である<sup>9</sup>。西南戦争前後、1ヶ月の新聞代は月極前払いで、大新聞は50銭から70銭、小新聞は20銭程であったという。当時の米価は1升6銭前後、大新聞1ヶ月分の購読料は米1斗に相当した。これに対して篠田の『鹿児島戦争記』や大西の『鹿児島軍記』『鹿児島美勇伝』は1冊が3銭5厘で、この辺が平均価格だったらしく、篠田『鹿児島戦記』は上下2冊で6銭5厘とやや割引している。挿絵のない『鹿児島暴徒風説

録』は1冊が1銭8厘である。

事件の物語化された概要が、総ルビ付き、浮世絵師の絵入りという低いリテラシーに易しいメディア形態で、比較的安価な3銭5厘で入手できたので民衆に歓迎され、古いメディアが生きのびた。そして結果的には、大新聞を購読する層と、絵草子を講読する層とでは、戦争情報と戦争像が分裂したのである。

## 2) 西南戦争に関する官庁側の史料と戦記

上記の民間ジャーナリズムの世界の戦争報道と戦争認識に対して、戦争を戦った側、つまり勝った側の政府軍と負けた側の薩摩軍とそれに協力した諸隊は、どのような史料を残し、戦史を編集したのだろうか。本稿では、政府側に限定して考える。

西南戦争に関して膨大な量の官庁史料が作成され、現在までかなりの量が保存されていること、しかもその質が大変高いことは、研究者の間ではかなり知られているが、全体に関する目録や概観した文献はない。

まず直接戦闘に当たった陸海軍の文書である。既にこれらの文書は、猪飼隆明『西郷隆盛』(岩波新書、1992年)が、その存在と史料価値の高さについて言及している。また、地域史編纂の過程で該当地域に関係する部分が調査・複写され、利用された。九州各地の県史、市町村史が編纂される場合、資料編に陸海軍の史料が掲載されている例がある。アジア歴史資料センターで閲覧できる、防衛研究所所蔵、陸軍省大日記の中から、西南戦争に直接関係することが簿冊名から分かるものをリストアップしたのが、「表4 陸軍大日記中の西南戦争関係簿冊」である。もちろんこれは一部に過ぎず、この前後の他の大日記や、アジア歴史資料センターにまだ公開されていない簿冊の中にも多くの史料が残っている。海軍省文書の西南戦争関係簿冊はアジア歴史資料センターのサイトからはよく分からないので、後日の調査に委ねたい。

表4 陸軍省大日記中の西南戦争関係簿冊

明治10年	「大日記軍機の部征討陸軍事務所」上中下
明治10年	「大日記庶務の部征討陸軍事務所」一・二・五・完
明治10年	「大日記送達の部5月分送号大阪征討陸軍事務所」
明治10年	「大日記受領の部5月分受号大阪征討陸軍事務所」
明治10年	「大日記受領の部自8月至10月甲号大阪征討陸軍事務所務所」
明治10年	「大日記送達の部自6月至7月乙号大阪征討陸軍事務所務所」
明治10年	「大日記送達の部自8月至10月乙号大阪征討陸軍事務所務所」
明治10年	「大日記自6月至10月受領之部丙号大阪征討陸軍事務所」
明治10年	「大日記自6月至7月送達之部丁号大阪征討陸軍事務所」
明治10年	「大日記自8月至10月送達之部丁号大阪征討陸軍事務所」
明治10年	「大日記5月至6月伺之1戊号大阪征討陸軍事務所」
明治10年	「大日記自7月至8月伺之2戊号大阪征討陸軍事務所」
明治10年	「大日記自5月至10月進退之部辞号大阪征討陸軍事務所」
明治10年	「大日記自5月至10月進退之部進号大阪征討陸軍事務所」
明治10年	「大日記2月より9月迄出張軍団本営進退辞令之部征討軍団本営」
明治10年	「大日記2月3月辞令之部軍団本営」
明治10年	「大日記7月8月9月辞令之部軍団本営」
明治10年	「大日記3月天軍団本営」
明治10年	「大日記4月發博多陸軍參謀部」
明治10年	「大日記4月乙軍団本営」
明治10年	「大日記4月甲軍団本営」
明治10年	「大日記6月1日乙軍団本営」
明治10年	「大日記6月1日甲軍団本営」
明治10年	「大日記7月發軍団本営」
明治10年	「大日記3月来南軍団參謀」
明治10年	「大日記4月来甲軍団本営」
明治10年	「大日記4月来乙軍団本営」
明治10年	「大日記5月来甲軍団本営」
明治10年	「大日記5月来乙軍団本営」
明治10年	「大日記6月来甲軍団本営」
明治10年	「大日記6月来乙軍団本営」
明治10年	「大日記7月来甲軍団本営」
明治10年	「大日記7月来乙軍団本営」
明治10年	「大日記7月来甲2軍団本営」
明治10年	「大日記8月来甲軍団本営」
明治10年	「大日記8月来甲軍団本営」
明治10年	「大日記8月来乙軍団本営」
明治10年	「大日記9月来軍団本営」
明治10年	「大日記10月旧軍団本營事務所」

西南戦争以後、軍関係文書を使用していくつかの戦史や従軍者の記録が編纂され、公刊された。筆者の目についたものは下記の通りである。

川口武定『征従日記』全7巻・付録，小林又七，1878年（?）

陸軍省編『征討軍団記事』陸軍文庫，1880年（1890年再版，発行者兼傍訓者相沢富蔵，発行所忠愛堂）

旧別働第三旅団参謀部編『西南戦闘日注』畏三堂，1884年

安藤定編『別働第二旅団戦記』和装4冊，出版社不明，1887年

そして、陸軍の戦闘の全過程を詳細に叙述した大冊、参謀本部編纂課編輯『征西戦記稿』全65巻・付録，陸軍文庫，1887年が刊行された。その凡例の冒頭に、「既ニ征討軍団記事ノ著アリ故ニ是書ハ軍団記事ノ文ヲ掲ケテ網ト為シ之ニ諸旅団戦闘ノ委曲ヲ付載シ以テ其目ト為ス」とあることから分かるように、1880年に陸軍省から刊行した『征討軍団記事』の文章を大活字でそのまま引用し、その間に小活字で各旅団の戦闘詳報を挿入したものであった。そして凡例の最後に、この書を「稿本」と称した理由について、「征西ノ戦闘ヲ記スル者ニシテ征西全局ノ顛末ヲ伝フル者ニ非ス」、また戦闘の外形を記すのみで「戦略戦法」・「運輸給養ノ方法」等を詳述していないことをあげている。参謀本部自身が、戦闘の歴史だけでは戦争史とはいえない、単なる戦闘経過のみならず、戦術・戦略・補給の分析が必要であり、さらに戦争を歴史過程の中に位置づけることによって、はじめて西南戦争の総合史の叙述といえるという、真っ当な考え方を持っていたことが分かる。陸軍の膨大な戦闘記録に匹敵するものとしては、海軍省編『明治十年西南征討誌』全4巻・付録，1885年として刊行された<sup>10</sup>。

国立公文書館が所蔵する太政類典と公文録のなかに、内閣の西南戦争に関する記録が残されている。1877年の簿冊名から明らかにそれと分かるものをリストアップしたものが、「表5 国立公文書館所蔵の西南戦争関連簿冊」である。陸軍史料と同様にこれ以外に大量の関係史料があることは、国立公文書館のサイトで、関連するキーワードを入れて検索を掛けてみる

表5 国立公文書館所蔵の西南戦争関連簿冊

<p>太政類典・雑部          明治十年～明治十四年・第一巻～第二十五巻・鹿児島征討始末一～二十五</p> <p>公文録          明治十年・第百五十二巻・鹿児島征討機密書類          明治十年・第百五十三巻・鹿児島征討電報録完          明治十年・第百五十四巻～第百五十七巻・鹿児島征討行在所太政官電報訳文一～四</p> <p>明治十年・第百五十八巻～第百六十巻・鹿児島征討電報来信訳文一～五          明治十年・第百六十一巻～第百七十一巻・鹿児島征討電報録一～十一          明治十年・第百七十二巻～第百七十三巻・鹿児島征討行在所電報雑一～二          明治十年・第百七十四巻～第百七十五巻・鹿児島征討始末別録一～二          明治十年・第百七十六巻～第百七十七巻・鹿児島征討電報発信原稿一～二          明治十年・第百七十八巻・鹿児島征討電報戦報之部大阪引払迄          明治十年・第百七十九巻・鹿児島征討電報諸往復之部大阪引払迄          明治十年・第百八十巻・鹿児島征討行在所戦法訳文          明治十年・第百八十一巻・鹿児島征討電信番号録          明治十年・第百八十二巻・鹿児島征討山形県電報          明治十年・第百八十三巻～第百九十巻・鹿児島征討行在所電信原書一～八          明治十年・第百九十一巻～第百九十六巻・鹿児島征討電報来信原書一～六          明治十年・第百九十七巻・鹿児島征討中原尚雄等口供          明治十年・第百九十八巻～第百九十九巻・鹿児島征討始末一～三          明治十年・第二百一巻・鹿児島征討戦状電報録          明治十年・第二百二巻・鹿児島征討賊徒姓名簿          明治十年・第二百三巻・鹿児島征討始末附録          明治十年・第二百四巻・鹿児島征討日録          明治十年・第二百五巻・明治十年一月二十四日～二月十九日・鹿児島征討日記</p> <p>この他、単行本の鹿児島征討始末一～三、別録一～二、附録および各種日誌・日記 鹿児島征討日記（欠巻）がある。</p>
--

と、大量の史料がリストアップされることから明白である。

今、防衛研究所と国立公文書館の所蔵資料について検討したが、これ以外にも地域の公文書館や公文書館的機能を有する図書館の郷土資料中に、膨大な史料があることは言うまでもない。筆者が閲覧したなかでも、熊本

県立図書館および長崎県立図書館の郷土資料中には多くの関係史料があるし、東京都立公文書館にも多くの史料があり、北原糸子氏や大日方純夫氏などが論文で使用している。さらに様々な政府機関・行政機関や個人の所蔵文書にまで探索の手を伸ばせば、その数量は想像もつかないものとなるであろう。

## 第2章 『西南記伝』の形成過程と内容

第1章で西南戦争の最中の戦争報道と、戦争に関する官庁史料とそれに基づく陸海軍の西南戦争史叙述について検討した。民間の西南戦争史叙述にも目を向ける必要があったが、そもそも西南戦争史を叙述した作品が非常に貧弱なことで紙幅の関係で省略した。このように民間の西南戦争史叙述が低調であり、戦争終了後約10年ほどで刊行された陸海軍側の大部な戦史が、自らも認めているように、詳細ではあるものの「戦闘経過の歴史」に限定している中で、西南戦争の総合史への指向を有する歴史叙述が1893年に登場した。著者は紫山川崎三郎<sup>11</sup>、発行所は明治出版界の覇者となる博文館である。博文館は越後長岡から上京した大橋左平・大橋新太郎の親子が1887年6月に設立した出版社で、まさに上昇気流に乗ってあたるべからざる勢いであった。本章はまず著者とその所属した出版社の説明から始めなければならない。

### 1) 『西南記伝』の著者紫山川崎三郎

川崎三郎の名前を知る人は、今、希である。わずかに日本古代史の研究者や大学院生が、川崎が生涯の最晩年に刊行した『訳注大日本史』を便利な辞書がわりに使用するだけである。漢文が日本語に訳されており、かつ注釈が良くできていて便利である<sup>12</sup>、という理由だという。それ以外では、彼は「忘れられたジャーナリスト・史論家・アジア主義者」である。以下、

表6 川崎三郎著作一覧

著書	
1	北村三郎『新帝国策』 興文社、1887年5月
2	北村紫山『東洋策』 尚武社、1888年7月
3	北村三郎『帝国憲法正解』 石川商店、1889年2月
4	北武侯禪述・北村三郎解『議院法正解・貴族院令正解・衆議院選挙法正解・会計法正解』 石川商店、1889年4月
5	北村三郎『支那帝国史上』(万国歴史全書第2編) 博文館、1889年10月
6	北村三郎『支那帝国史下』(万国歴史全書第3編) 博文館、1889年11月
7	北村三郎『印度史・亜細亜小国史』(万国歴史全書第4編) 博文館、1889年12月
8	北村三郎『土耳其史・亜細亜古国史』(万国歴史全書第5編) 博文館、1890年1月
9	北村三郎『魯国史』(万国歴史全書第9編) 博文館、1890年6月
10	北村三郎『日耳曼史』(万国歴史全書第10編) 博文館、1890年9月
11	北村三郎『欧州列国史』(万国歴史全書第11編) 博文館、1890年10月
12	北村三郎著・中洲居士補『護国美談振天動地』 東京野口竹次郎、1890年5月
13	北村三郎『和漢名家文粹上巻』(東洋文芸叢書第5編) 博文館、1890年7月
14	北村三郎『和漢名家文粹下巻』(東洋文芸叢書第6編) 博文館、1890年8月
15	北村三郎『世界百傑伝』 博文館、全12冊、1890年3月～1891年4月
16	北村紫山『維新三傑』(少年文学第4編) 博文館、1891年6月
17	紫山居士著・中洲居士補『元寇反撃護国美談』 東京護国堂、1891年10月
18	川崎三郎『新撰支那国史』 博文館、1891年12月
19	北村三郎『尽忠之光(一名谷村計介伝)』 厚生堂、1892年9月
20	川崎三郎『東北地方特別大演習記』 育英舎、1892年10月9日
21	川崎紫山・松井柏軒『日本百傑伝』 博文館、全12冊、1892年1月～1893年6月(6巻以降川崎担当)
22	川崎紫山『安土公(元龜天正三傑)』 東京涉史園、1893年6月
23	川崎三郎『戊辰戦史』 博文館、全12編、1893年12月～1894年7月
24	川崎紫山『西南戦史』 博文館、全12冊、1893年7月～12月
25	川崎三郎『西郷南洲翁逸話』 福岡磊落堂、1894年3月
26	川崎紫山『朝鮮革新策(一名日清開戦論)』 博文館、1894年7月
27	川崎紫山『西郷南洲翁(寸珍百種第40編)』 博文館、1894年7月
28	川崎三郎『獨佛戦史』(万国戦史第1編) 博文館、1894年9月
29	川崎三郎『日清海戦史』 春陽堂、1895年12月
30	紫山野人・米峰樵夫『日清陸戦史』 春陽堂、1896年6月
31	川崎三郎『日清戦史』 博文館、全7冊、1896年12月～1897年7月
32	川崎三郎『藤田東湖』 春陽堂、1897年4月
33	川崎紫山『西郷南洲』 春陽堂、1897年6月
34	川崎紫山『幕末三俊』 春陽堂、1897年11月
35	川崎三郎『大久保甲東』 春陽堂、1898年4月
36	中川清次郎著・川崎三郎補『西力東漸史』 春陽堂、1898年7月
37	川崎三郎『小文章』 博文館、1899年11月
38	川崎紫山『西郷隆盛』(少年読本第18編) 博文館、1899年12月
39	川崎紫山『増訂西南戦史』 博文館、1900年6月
40	川崎紫山『木戸松菊』 春陽堂、1900年11月
41	川崎紫山『東邦之偉人』 文求堂、1903年6月
42	川崎三郎『戦争の動機』 金港堂、1904年7月

- 43 川崎三郎『神武天皇の中州平定と錦浦との関繫』 神武天皇聖蹟顕彰会, 1931年9月
- 44 川崎紫山『非常危機に対する安政大獄と殉難烈士の回顧』日本時代社, 1934年1月
- 45 川崎三郎『訳註大日本史』1-12, 同刊行会, 1938年-1941年
- 46 川崎三郎『南北紀游詩稿』 私家版非売品, 1939年9月
- 47 北京池宗墨著・日本紫山川崎三郎校『王道経論集』 大東亜協会, 1941年5月
- 48 川崎三郎『日記より見たる乃木将軍』 大東亜文庫, 興文社, 1942年9月
- 49 川崎三郎『大西郷と大陸政策』 大東亜文庫, 興文社, 1942年10月

編纂事業への参加

- ①黒龍会本部編『西南記伝』, 全6冊図版, 1909年11月~1911年4月
- ②徳富猪一郎編述『公爵桂太郎伝』乾坤, 故桂公爵記念事業会, 1917年2月
- ③大津淳一郎『大日本憲政史』全10巻, 宝文館, 1927年5月~1928年9月
- ④徳富猪一郎編述『公爵山県有朋伝』全3巻, 山県有朋公記念事業会, 1933年2月
- ⑤徳富猪一郎編述『公爵松方正義伝』乾坤・年譜, 公爵松方正義伝記発行所, 1935年7月
- ⑥蘇峰徳富猪一郎著『陸軍大将川上操六』薩藩史研究会, 第一公論社, 1942年1月
- \* 徳富蘇峰編纂の, 桂, 山県, 松方, 川上伝の執筆者・アンカーマン。大津淳一郎の『大日本憲政史』の実質的な執筆者。

拙論に従って、彼の略歴を行論に必要な範囲で紹介する。

川崎の著書を年代順にリストアップすると「表6 川崎三郎著作一覧」のようになる。現在分かっている範囲では、最初の著書は1887年5月出版の『新帝国策』で、以後生涯に50冊に近い著作・編著を世に送った。処女作『新帝国策』は対外積極策を鼓吹する生硬な政治小説、次の『東洋策』（1888年）は対外政策論、続く石川商店から出た本は実用書と、初期の川崎は色々な分野に手を染めたが、博文館の企画に参画した1888年以降は歴史書と人物評伝に集中し、ここで才能を発揮した。しかし、40歳を越えると突如次々と単著を発表するという旺盛な著述活動は影を潜めた。これ以後の川崎は、大津淳一郎や徳富蘇峰などの企てた憲政史や政治家の伝記の編纂事業に参加したり<sup>13</sup>、大日本史の訳注を試みたりしてプロの著述家としての評価は保ったものの、時流に合わなかったのか、あるいは他分野の活動が多忙だったのか、流行文筆家・歴史家ではなくなった。彼は以上のような著述活動をする一方で、ジャーナリスト（新聞記者として、東京曙新聞、大東日報、経世新報、中央新聞、信濃毎日新聞に関係、この他に国民之友、国民新聞、雑誌太陽などの常連の寄稿者でもあった）、そしてア

ジア主義者（東方協会、黒龍会等に関係）として活動した。また川崎は兵役逃れのため一時北村姓を名乗り、北村名で著書・記事を發表しているが、論文中では川崎に統一した。

### ジャーナリストとアジア主義者の誕生

川崎三郎は元治元年（1864）5月4日、水戸藩士川崎長蔵胤興の三男として水戸に生まれた。名は三郎胤贊（たねよし）、号は紫山を多用した<sup>14</sup>。水戸藩校弘道館は1872年廃校となり、学制発布後も水戸には暫らく中等教育機関が存在せず、川崎は正規の近代教育を受ける機会に恵まれなかった。彼が学んだ自強館（時に自強社又は自彊舎と記される）は旧藩学の伝統を継承しようとする私塾の代表格で、1876年4月、岡本正靖、大関俊徳らによって上市藤沢小路に開かれ、塾生の増加とともに78年には田見小路に校舎を新築、塾生400名を数えたという。しかし、師範学校（1874年）、中学校（1880年）等の公立学校が整備されると塾生が減少し、1886年には閉塾になった。自強館を旧弊な「漢学校」と非難するむきもあったが、国史漢籍算術の伝統的教育を主としつつも、法律書西洋訳書の教授も行われていた。この他、那珂暴動鎮圧に自強館所属の士族が動員された例や、1882年、藤田東湖の長男藤田健が茨城県警察部長に就任すると、かつての天狗党に連なる人々を中心に自強会なる政治結社を組織して立憲帝政党と連絡を取ったが、自強館の関係者もその有力メンバーで、自強館は政治結社的性格を有した<sup>15</sup>。

川崎は水戸での学問が一段落した17歳の頃、即ち1880年頃に上京し、短期間の大蔵省勤め（ここで生じた渡辺国武との縁が後年の新聞発行に繋がるが、これは後述）の後、翌年からジャーナリズムの世界に身を投じた<sup>16</sup>。川崎が『東京曙新聞』の新聞記者となったのは、民権色をわずかに保っていた同紙が、政府機関紙、そして立憲帝政党機関紙へと変質する過渡期であり、次に就職した大阪の『大東日報』は純然たる帝政党機関紙であった。

川崎は初期のジャーナリストとしての経歴を保守政党、御用政党の機関紙の記者として開始したのであった。そして徴兵逃れのために『東京曙新聞』編集者・経営者岡本武雄の親戚の家を継いで、北村姓を名乗るようになった。ところが不運なことに、彼の属した大東日報は吏党機関紙として出発したにもかかわらず、政府と帝政党の間に齟齬が生じ、補助金を打ち切られ、帝政党自体も1883年9月に解党したので、直ぐに経営難に陥った。このため彼は新聞記者だけでなく著述家として世に出る道を選ばざるを得なかった。

川崎の第1作『新帝国策』は満23歳の出版である（1887年5月）。第2作は『東洋策』（88年7月）。前者は国権的政治小説の先駆的作品であり<sup>17</sup>、後者は東洋経綸策の提示で、媒体の形式は異なるが内容は連関している。空想的な亜細亜大帝国樹立に夢を馳せた前者の内容紹介は省略せざるを得ないが、彼の政治思想の一端を知るためには、後者の内容を簡単に紹介しなければならない。

『東洋策』は序文を信じると、1887年8月の擱筆である。彼の状況認識とそれに対して提示した対応策は、大要次のようである。欧州列強の合従連衡と東洋進出、なかんずくロシアの進出は急で朝鮮は危機に陥る。我が国は日露仏同盟を締結、露国の東方領土拡大を承諾し、日露協力して朝鮮を併呑、次いで日清戦争に勝利して東洋の盟主となるべきである。しかる後、日清同盟を実現し、欧州列強と対峙することが可能となる。かかる対外政策（川崎の用語では「計略〔コンケスト〕ノ策定」あるいは「進取主義」の国是の確定）の鍵は君主の主導性＝君主政治主義にあると彼は主張した（東洋ノ策ヲ決スルハ我皇上一大雄断如何ニアリ）。ところが日本では歴史的に門閥政治に終始し君主政治主義は実行されたことがなく、維新革命後の雄藩政治（藩閥政治）も門閥政治の一変種である。この状況を打破して君主政治主義を実現するために彼が主張した方策は、憲法制定と国会開設であった（誠ニ能ク我皇上ニシテ憲法ト国会トノ道ヲ以テ、国民

ノ自由ヲ伸暢シ臣子ノ権利ヲ優重シ制度ヲ整ヒ国体ヲ固クシ、以テ内治ノ改正ヲ図ラセ給フ時ハ、何ソ大臣専権ノ弊ヲ憂フルニ足ラン哉、何ソ聯立内閣ノ害ヲ患フルニ足ラン哉)。憲法と国会は、国民の自由と権利を保障するという常識的な意味に止まらず、国体を確定し国内政治を安定化させ、天皇を能動的君主化する手段として肯定された。そして天皇が露国皇帝と会同、東洋策を決定することが彼の夢であった。

以上に見られるように、列強とくにロシアに対する強い危機意識と彼独自の情勢認識に基づいて、国内では立憲主義的な能動的君主政治を実現し（これは藩閥政治下で政治から排除されていた川崎のような非藩閥・非エリート層の政治参加を議会開設で実現することにもつながる）、対外的には対露提携策（日露仏同盟）を外交政略の基軸としつつ、その上で段階的に朝鮮併呑、日清戦争とそれに続く日清同盟を実現し、東亜諸国が提携して欧米列強と対抗するのが川崎の構想であった。

このような対外政策の確定とそのための国内改革の実施という構想を川崎は如何にして獲得したのであろうか。筆者は思想史的な分析を行う能力に欠けるが、一読して川崎の発想や用語、そして『東洋策』の編別構成は、『新論』（会沢正志斎著、1825年）とよく似ていると思った。三谷博氏は『新論』を政治史の観点から読み直し、会沢の議論は攘夷論を唱え、ナショナリズムを喚起することで、「守禦」のための改革エネルギーを引き出そうとするものであったこと、彼の攘夷論は鎖国をそのまま肯定する現状維持論ではなく、攘夷を主張しながら、国外に同盟国を探し求めんとするもので（当時は実現しなかったが）、後の「積極型開国論」（日本から海外に航海し、通商と勢力拡大を図る）に通じるものであったこと、そして彼はこの困難な課題の実現を「国家の指導者のリーダーシップにすべてを期待」したことを指摘している<sup>18</sup>。

川崎は会沢の著書を学び、60年後の新たな東洋情勢を会沢の方法で分析し、この対策として上記の国内改革案と東洋経綸策を提起した。しかし、

川崎の積極的東洋経論は当時の政治青年の議論としては特別に変わったものではなかった。「日本そのものの存亡の危機への『過慮』からくる、『外交の神経症』の所産」である偏った「世界情勢・東アジア情勢の認識と自意識」が、「膨張主義的・軍国主義的ナショナリズム」を生み出し、これが在朝在野あるいは思想の如何を問わず、国民各階層の間に浸透していたことは、すでに芝原拓自氏が指摘したところである<sup>19</sup>。

### 創立期の博文館と編集者・著述家としての川崎

『新帝国策』と『東洋策』で積極的（すなわち侵略的・武断的）東洋経論を主張するアジア主義者として読書界に登場した川崎は、つぎに新興出版社の雄であった博文館の企画に参加して、著述家・史論家としての才能を世に広く知られるようになった。博文館は越後長岡で『越佐毎日新聞』を運営していた大橋佐平、大橋新太郎父子が上京して、1887年6月に設立した出版社である。1888年4月25日創刊の『日本之時事』（松井広吉が担当）を手伝うため川崎は入社し、次いで5月15日創刊の『日本之兵事』の主筆となった。しかし『日本之兵事』はわずか11号（1889年3月号が最終号）で廃刊に至り、川崎は単行本の著述に集中した<sup>20</sup>。

最初に『万国歴史全書』12冊（1889年～1890年出版）のうち『支那帝国史』上・下巻、『印度史・亜細亜小国史』、『土耳其史・亜細亜古国史』、『魯国史』、『日耳曼史』、『欧州列国史』の7冊を執筆した。次に『東洋文芸叢書』の『和漢名家文粹』上・下巻を著し、一躍彼の名前を高めた『世界百傑伝』全12冊（1890年～1891年出版）の企画に1人で着手した。『万国歴史全書』の川崎担当部分は本文3500頁強、『世界百傑伝』も12冊で4000頁を超えるから、この両シリーズだけで軽く四六判で7500頁以上になる。僅か3年（実質的には『日本之兵事』廃刊の1889年春から1891年春までの2年間か）でこの膨大な原稿を彼は書き上げた。

『万国歴史全書』シリーズの代表作『支那帝国史』（上下2巻で1000頁強）

の序文によると、川崎の修史作業は水戸で学んだ漢学を主としつつ、上京後に志した洋学の知識を加え、広範な史料・書物を渉猟し、それに彼独自の視点で分析を加えた歴史叙述で、序文を寄せた田口卯吉や栗本鋤雲が誉めたように構想力には非凡なものがあつた。そして現代史に及んだ中国史叙述の延長上に東洋経綸論が展開された。しかし、大著を非専門家のジャーナリストが短時間で書くのだから問題が生じて当然で、その一つが「剽窃」問題である。すでに『万国歴史全書』シリーズ第1巻の松井柏軒『日本帝国史』が、嵯峨正作『日本史綱』を剽窃したとして告訴され、絶版条件で和解していた。第2巻の川崎『支那帝国史』も、那珂通世の『支那通史』の剽窃として訴えられ、交渉の結果和解したという<sup>21</sup>。

『万国歴史全書』に続く作品で、もっとよく売れたシリーズが『世界百傑伝』である。全巻川崎個人の著作で、140人余の世界的偉人の伝記集成である。『百傑伝』の叙述は、啓蒙的性格と国民の元気を鼓舞する煽動的性格を特徴として挙げることができる。万遍なく東西の偉人140余名をリストアップした目配りはさすがであつた。叙述の特徴は『百傑伝』第1巻に序文を寄せた徳富蘇峰の評一読者の若者に大志を抱かせ、それを鼓舞する著作である一が当を得ているだろう。

君ノ文豪蕩ニシテ奇気饒シ、君カ文ヲ以テ古今東西ノ英傑ヲ伝フ、想フニ必ラス其ノ烈々轟々タル神來雄風ヲ描キ來リ、読者ヲシテ概然卷ヲ投シテ英傑我ヲヘ距ル遠カラサルノ志ヲ起サシムルモノアラン

百傑伝に挙げられている偉人は、実は前述の『支那帝国史』首編第1章「総叙 支那ノ国勢ヲ論ズ」に登場する東西の偉人名（中国には世界の他地域の偉人と匹敵するあらゆる分野の英雄人傑が存在したことを強調する文脈で紹介される）と重なっている。つまり、百傑伝の最初のアイデアと偉人百傑を叙述するための史料は『万国歴史全書』シリーズ執筆の過程で既に用意されていたのであり、同じ史料と文章を使い回しながら百傑伝は書かれた。ここに短時間で大量の原稿を執筆した川崎の秘密の一つがあ

った。また『支那帝国史』は、この時期の川崎の著作における序論（出発点）であるとともに結論であった。川崎の東洋経綸策の中心は対清国政策であるが、若いアジア主義者の思索は清国から出発して、インド、トルコ（欧州列強に侵略された地域）の失敗経験を尋ね、ついで欧州列国を巡って政体の変化の歴史と強国化の原因を捜し求め、そして再び東洋に回帰したのである。

1890年秋から1891年にかけて、川崎はつぎの項で説明する雑誌と新聞の発行で忙殺されて一時執筆のペースが落ちたが、1892年以降再び旺盛な執筆活動がみられた。まず松井柏軒（1890年秋から中央新聞入社、博文館編集局も掛け持ち）が持て余していた『日本百傑伝』の後半部分（第6巻の秀吉・家康から第12巻幕末維新期の藤田幽谷・西郷隆盛等まで、1893年2月～6月）を一気呵勢に仕上げ<sup>22</sup>、次いで『西南戦史』と『戊辰戦史』の二大作を1893年と1894年前半に出版した。とくに『西南戦史』はその後、『増訂西南戦史』（博文館、1900年6月）、『西南記伝』（黒龍会本部、1909年～1911年）と改訂を重ね彼のライフワークとなった。そして1894年に満30歳となった川崎は史論家として確固たる地位を築いた。

ここまで急ぎ足で川崎三郎の前半生とアジア主義思想を抱くジャーナリスト・史論家の誕生の経緯を描いた。それと同時に、彼が歴史家・史論家の才能を開花させるに当たって、新興出版社博文館の経営戦略が大いに関係していたことが明らかになった。

博文館の創立は明治維新から丁度20年目の1887年であり、西南戦争から10年が経過していた。1890年の帝国議会開設に向けて、明治維新とそれ以後の現代史を振り返ることができる時代になった。博文館は実用書・教科書の出版から出発したが、次第に出版の範囲を広げ、伝記・歴史書さらには日本古典の復刻にも手を染めつつあった。早稲田大学学生時代から博文館の出版事業に関与し、卒業後博文館に入社して、編集出版の中心となり、後には経営を担った坪谷善四郎が執筆した『明治歴史』が刊行されたのが

1893年である。上下2巻、総頁数1400頁弱の大冊は、上巻で明治維新を、下巻でそれ以後の明治史（政変史，財政史，外交史，社会変遷史からなる総合史）を扱った画期的現代史である。1889年から1894年の5年間、つまり川崎の25歳から30歳までの間、川崎を連続して博文館の企画する『万国歴史全書』『世界百傑伝』『日本百傑伝』『戊辰戦史』『西南戦史』という大部な歴史企画に参画させ、彼が歴史家・史論家として世に出る機会と修練の場を提供したのも、編集主任の坪谷であった。

博文館版『西南戦史』全12巻（1893年刊）との関係だけで言えば、彼の経歴の紹介はここまでで充分である。しかし、彼はその後2度にわたって自著を改訂し、『西南記伝』を完成させた。その理由を考えるためには、1890年から日清戦後の『日清戦史』7巻（1896～1897年）執筆までの彼の活動と対アジア構想を概観する必要がある。

### 新聞経営と挫折、対外硬運動から日清戦争へ

1890年から川崎の政治活動への参加が本格化する<sup>23</sup>。

その一つは1890年1月設立の東邦協会への参加である。同会は小沢豁郎、福本誠、白井新太郎の発起で、東洋と南洋に関する地理・商況・兵制・植民・国際事情・歴史・統計等を調査講究し、よって邦人の雄飛を図ることを究極の目的とした。川崎は創立委員となり、池辺三山とともに編集委員に納まった。また同会の設立趣意書の起草に川崎が当たり、陸羯南が修正したという<sup>24</sup>。

第二は雑誌『活世界』の発行である。1890年秋、鈴木力（天眼）、佃信夫（斗南）、川崎の3名が、元長崎県知事日下義雄の援助を受け、神田駿河台鈴木町の借家に蒼龍窟という厳めしい名前をつけ、雑誌と書籍を出版した。雑誌の趣旨は「民権論勃興の結果、過激の思想が漲り来つてその余弊甚だ憂ふべきものがあつたのと、一方藩閥の情弊が漸く著しからんとするに鑑み、日本魂の鼓吹によりて時弊を廓清し、且つ我国の政治上の機構

を革むると同時に大陸発展の氣風を鼓吹せんとするにあつた」という典型的な国粹主義とアジア主義の主張から構成されていた。しかし、1891年、川崎が経世新報、鈴木が二六新聞、佃が育英事業（隗始門）に携わるようになったため頃解散した。

経世新報は1891年9月9日創刊、この新聞は川崎がジャーナリスト、アジア主義者としての自己の抱負を実現しようとしたもので、陸羯南の日本（1889年創刊）、徳富蘇峰の国民新聞（1890年創刊）と同類の「独立新聞」であった。しかし、一方で松方正義文書所収の経世新報の規約、設備一覧、収支予算（1891年10月12日）を見ると、同紙は時の総理大臣松方正義より創業資金2万円を与えられ、大蔵次官渡辺国武の監督下にあった松方系機関新聞であることが一目瞭然である<sup>25</sup>。この時期、藩閥指導者、各官庁が機関紙（一般には秘匿された場合もある）を持っていたが、経世もその一つだった。経世新報社長は中島新一であったが、実質的な中心は主筆の川崎だった。創刊号には北村（川崎）宛の祝辞が徳富蘇峰と松井柏軒から寄せられ、彼の知人の稲垣満太郎が論文を掲載した。「規約」の用語にも川崎の主張が顕されている。「国力ヲ統一シ民心ヲ協和スル」とは、経世創刊の辞で彼が強調した「国是主義」と同意である。同紙は松方側には機関新聞だが、川崎は自己の国粹主義的・アジア主義的思想を宣伝する手段であると認識していた。松方側が「規約」の監督権限を効果的に行使し得なかったため（能力と意欲の両面から）、川崎等の編集陣の側が独走して、結果的に機関新聞の存在が反って藩閥内部の矛盾と対立を激化させる事態が生じた。その頂点が1892年3月11日の「雲台の機微」事件<sup>26</sup>で、この結果経世は長期休刊を強いられ、結局9月末に廃刊に追い込まれた。

またしても短期間で新聞が潰れてしまった（今度は自分が潰してしまった）川崎は、友人松井柏軒の後を追って中央新聞に記者として入社したらしい。中央新聞は第1次松方内閣の与党国民協会の機関紙で、社長は国民協会幹部の大岡育造だった。彼はこの新聞の有力記者として知られ、「新

聞記者同盟」のリーダーとして対外硬派の一翼を担った<sup>27</sup>。

1894年6月、混成旅団が朝鮮に派遣され、日清開戦の危機が高まると、川崎は『朝鮮革新策（一名日清開戦論）』なる小冊子（本文176頁）を書き上げて博文館から発行した。原稿の完成は6月末か7月初頭、印刷7月27日、発行7月30日である。彼は東洋の軍事力を分析して現時点では日本有利との判断を下し、①日清戦争によって清国勢力を朝鮮から追放し、その後旧体制を一新するため李王家を廃して朝鮮公国（朝鮮の名族中から朝鮮公を選定）とし、これを日本の保護下において内政改革を実施する、②日清交戦で漁夫の利を占める英露両国を互いに牽制させて干渉を防止する、③清国に対しては澎湖島と長江河口の崇明島割譲のみを求め日清盟約を結ぶ、④その上でインド・トルコ・ベトナム・シヤム・ビルマの独立援助を行うという方策を彼は提起した。年来の東洋経綸論実現の好機到来と意識され、イメージの翼は東洋の範囲を超えてアジア全体に及んだのだ。

川崎は中央新聞の従軍記者として、1894年9月3日に新橋を発ち、第1軍司令官の山県有朋に同行して同月8日宇品から朝鮮へ向かった。仁川・ソウル・開城を経由して平壤に至り、平壤戦闘の跡を見学し、以後平壤の戦闘と第1軍の進軍に関する多くの記事を送った。これらの記事は「従軍日記」（13回連載）と「北征」（21回連載）の同時並行的に掲載された2つの連載記事となる。その後「赤痢病」に罹り第1軍従軍を途中で切り上げ、翌年講和条約が成立する頃までソウルに止まった。彼のソウル通信は「京城特報」「漢城警信」「韓京所見」等の題が付され、ソウルの政情が報告されると同時に、それと同程度の比重で清国勢力を追放した後の朝鮮に如何にして日本勢力を扶植するかが論じられた。中央政府に日本人顧問を置くのに倣って、各道の地方官にも日本人を任命して地方行政権と警察権を掌握せよとの提言を行い、日本人移民の朝鮮移植論を主張した<sup>28</sup>。

彼の朝鮮派遣に際して中央新聞は史論家、とくに戦争物に定評のある川崎の従軍記事に多大な期待を持ち、かつ川崎自身も期するものがあつた<sup>29</sup>。

しかし病気のために途中で引き返さざるを得なかったため、そしてさらに大きな理由として近代戦の戦闘シーンを客観的かつ的確に描写する能力と史論を書く能力とが違っていたことから、日清戦争の従軍記者として川崎は成功したとは言えず、ソウルに止まって戦争ではなく政策論を書き続けざるを得なくなった。帰国後は戦争の勝利、講和条約、三国干渉、閔妃事件を経験し挫折感を味わうなかで（とりわけ彼の対外政策論の中心であった対露提携論の破綻は彼に衝撃を与えた）、戦争に勝って戦争目的が実現できなかった失敗した戦争である日清戦争の実相を伝え、国民に「警醒の念」を起こさせるために『日清戦史』の執筆に集中した。

『日清戦史』執筆の経緯は、同書の例言に「本書は稿を二十八年の夏に起し、二十九年の夏に脱す。其間実に一年有余。然りと雖、本書を編述せんとするの決心は、二十七年日清開戦、著者が筆を載せて第一軍に従ひ戦地に赴くの際に在りき。故に其材料の蒐集は決して一朝一夕の故に非ず」とあるので、当初から戦史編纂の意図があったことは事実であろう。彼は『日清戦史』刊行以前に、『日清海戦史』（1895年12月発行、春陽堂）と『日清陸戦史』（1896年6月発行、春陽堂）の2冊の戦史を発行している。これら2冊の戦史とその執筆用資料が博文館版の戦史に利用されたことは疑いないが、春陽堂版戦史と博文館版戦史との間には決定的な違いがある。前者は当時も類書が出ていた戦闘の歴史に限定されているが、後者は総論、開戦原因論、陸戦および海戦の経過、開戦及び終戦外交、戦争と国際法、台湾植民地平定戦争を詳述した戦争の総合史（しかも他に例のない全7巻の大部な著書）となっている。そして博文館版戦史の如き高度の歴史叙述に彼が取り組む原因となったのは、前述した川崎の従軍記者への不適応＝失敗と自らの東洋経綸論の破綻という二重の挫折であった。日清戦争時に明らかになった彼の資質と思想の両面から、その後の彼は新聞ジャーナリストとしては必ずしも時流に乗ることができず（中央新聞と信濃毎日新聞の主筆を経験したというが）、アジア主義思想の実践活動家・史論家とし

て生きざるを得なかった。日露戦争後は日韓合邦運動に精力を傾注したが、朝鮮植民地化が現実性を持つとともに、皮肉にも彼らの「合邦」運動が権力から見捨てられていく中で、川崎は『西南記伝』執筆に全力を投じ、ここで彼らの思いと怨念を披瀝するしかなかったのである。『西南記伝』は史論家としての最後の輝きを放った作品であり、しかも自らも参加した政治運動への挽歌でもあった。

## 註

- 1 内田良平，うちだりょうへい，1874年から1937年，福岡出身の右翼運動家。初瀬龍平『伝統的右翼内田良平の研究』（九州大学出版会，1980年）が代表的研究書，伝記に黒龍倶楽部編『国土内田良平』（原書房，1967年）がある。
- 2 『遠山茂樹著作集 第一巻 明治維新』（岩波書店，1991年）の198頁。
- 3 朝日新聞百年史編修委員会『朝日新聞社史』明治編（朝日新聞社，1990年）の3頁。
- 4 坂野潤治「征韓論争後の『内治派』と『外征派』」（『年報近代日本研究3』山川出版社，1981年）は，台湾出兵は「不平士族」の暴発を防ぎ，政府内部の軍部とくに海軍を政権側につなぎ止めるための内政の一手段として企画され，対朝鮮出兵よりも対清国全面戦争の危険性が少ないという情勢判断の下に実施された，と説明した。
- 5 表向き新聞通信員の形を取りながら，実際は日本政府による秘匿されたお雇いとして，ル・ジェンドルを補佐し，日本政府の政策意図を米国新聞に掲載することで一種の広報外交の先駆者となったハウスについては，拙著『近代日本の対外宣伝』（研文出版，1994年）を参照のこと。
- 6 この項は，吉見俊哉・土屋礼子監修『図録・明治のメディア師たち—錦絵新聞の世界—』（日本新聞博物館，2001年）を参照して叙述した。

なお，校正の過程で土屋礼子編『日本錦絵新聞集成（CD-ROM版）』文生書院を閲覧したところ，同史料集所収の「東京日々新聞」の錦絵新聞には，つぎの9点（異版1点を含む）が含まれていることが分かった。

712号（台湾の石門で日本兵勝利〔3枚組〕），726号（台湾の牡丹少女和服を着せられる），736号（大男の岸田吟香を背負う台湾土人），752号（台湾の牡丹社の土人が帰順する），847号（皇国支那和議結約之図〔3枚組〕），849号（日章旗を飾り清国との和議を祝う），851号（台湾で戦死した義弟の幽霊現れる〔文章の違う異版有り〕），号数不明（日報社台湾記事石門口戦勝の図）。

851号の異版を除くと，日本新聞博物館所蔵の錦絵新聞にないものが3点収録されている（下線部を施したもの）。

- 7 加藤裕治「新聞報道の誕生—西南戦争をめぐる報道からの考察—」『社会学評論』vol.49-No.2, 1998年が、社会学的観点から分析を行っている。
- 8 小新聞研究でまず依拠すべき研究成果は、土屋礼子『大衆新聞の源流—明治期小新聞の研究—』(世界思想社, 2002年)である。同書は、錦絵新聞を、ポピュラージャーナリズムの出発点であり、小新聞の成立する市場を準備し、小新聞の定着とともに消滅するメディアであると説明し、西南戦争を錦絵新聞消滅=小新聞定着の契機の一つと評しているように読めるが、西南戦争時の言論統制などさまざまな事項について論じてはいるものの、具体的な西南戦争報道の分析はおこなっていない。最古かつ最大部数を誇った小新聞である『読売新聞』の創刊直後の分析を、山田俊治『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』(日本放送出版協会, 2002年)がおこなっているが、西南戦争の直前で分析が終わっている。
- 9 山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局, 1981年)の第2部第1章第1節「西南戦争前後の新聞読者層」(60~75頁)を参照にした。
- 10 陸軍の『征西戦記稿』、海軍の『西南征討誌』および『征従日記』はいずれも、熊本地方出版社、清潮社から復刻されている。
- 11 川崎に関する拙論は以下の通り。「日清戦争と従軍記者」(東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容』下巻, ゆまに書房, 1997年所収), 「忘れられたジャーナリスト・史論家・アジア主義者川崎三郎」『専修史学』29号, 1998年, 「川崎三郎小論」(大阪大学文学部日本史研究室『近世近代の地域と権力』清文堂, 1998年)所収。
- 12 専修大文学部矢野建一教授(日本古代史)の評。
- 13 福地重孝「矢野龍溪宛書簡と『憲政発達史』」『日本歴史』43号に、矢野宛川崎書簡の一部が引用され、川崎が同郷の同郷茨城選出の代議士大津淳一郎の委嘱を受けて『大日本憲政史』(1927年~1928年)編纂に参加していることが明らかにされている。同書を読んでみると、実質的執筆者が川崎であるとの印象を持った。  
 大久保利謙は薩藩史研究会が『陸軍大将川上操六』(1941年)の伝記編纂を徳富蘇峰に頼んだところ、「蘇峰はこれを承諾して、すぐ『川崎(紫山)にやらせよう』というんです。つまりあの伝記は川崎紫山(ジャーナリスト。信濃毎日新聞の主筆などをつとめる)が書いた。実は、蘇峰の編著になっている『山県有朋伝』とか、伝記類は全部川崎紫山が書いているのです。川崎紫山という人は職業的な書き手で、原稿も期日通りにきちんと書く。しかも、こんなことをいうんです。『序章はいずれ蘇峰が書いてくれる筈だ。もし、できなかったら、わたしの原稿の結びをそのまま巻頭にもってあげればよいようにしてある。序章が予定通り入ったら、わたしのはそのまま結びにしてくれ。蘇峰が序章を書きましたから、予定通りになりましたが、そんな芸当のできるくらいの腕を持った」人物だったと回想している(大久保『日本近代史学事始め』岩波新書, 103~104頁)。単純化され、断定的に過ぎるので検証が必要であろう。同じ徳富蘇峰の編纂した伝記でも、桂, 山県, 松方, 川上の4人

- の伝記では、蘇峰と川崎の關係に当然変化がある。表6の川崎の著作一覧の範囲をどこまで広げるのか、限定するのか、今後の検討に待たねばならない。
- 14 川崎の伝記的記述がある辞書類は次の3点。松本龍之助『明治大正文学美術人名辞典』（1926年初版，1980年再版，国書刊行会），宮武外骨・西田長寿編著『明治新聞雑誌関係者略伝』（みすず書房，1985年），『国史大辞典』（吉川弘文館，1983年，川崎正胤氏執筆）。
  - 15 『水戸市史』下巻一の263頁～265頁，293頁～295頁，350頁の自強館に関する記述を参照。立憲帝政党は1882年3月18日，福地源一郎，水野寅次郎，丸山作樂らが組織した政党で，欽定憲法，天皇主権を党議綱領にうたった。高木俊輔「立憲帝政党関係覚え書」『歴史学研究』344号，大日方純夫「立憲帝政党の結党をめぐる基礎的考察」『日本史研究』240号を参照。
  - 16 川崎より3歳の年少ながら，博文館と中央新聞では職場の先輩として川崎とともに働いた柏軒松井広吉の回想録『四十五年記者生活』（復刻版，大空社，1993年）には「[博文館に一筆者注] 最も早く入館されたのは川崎紫山氏（当時北村三郎と称す，徴兵避けのため，岡本武雄氏〔東京曙新聞編集長，1879年～1881年まで同新聞経営者一筆者注〕の縁家の氏を冒されたのだといふ）だと記憶する，氏は大蔵省に勤務して，渡辺国武氏（無辺俠禪）の知遇を享け，露語なども学習し居られた。一時特色のある文豪家で，向島に住つて居られた。余との関係で中央新聞にも入り，また渡辺氏の後援で経世新報といふのを発刻されたら，その後は蘇峰先生の日本国民史の資料集にも参与され居ると聞いた」とある。
  - 17 『明治文学全集6・明治政治小説集(2)』（筑摩書房，1976年）所収の解説論文，柳田泉「政治小説の一般(二)」参照。
  - 18 新論の読み下しは『日本思想大系53水戸学』（岩波書店，1973年），同書所収の解説論文，尾藤正英「水戸学の特質」を参照。三谷博『明治維新とナショナリズム』（山川出版社，1997年）の第2章「19世紀前半の国際環境と対外論」，とりわけ第2節「会沢正志斎—ナショナリズムの鼓吹と攘夷による国家改革」参照。
  - 19 芝原拓自「対外観とナショナリズム」(『日本近代思想大系②対外観』，岩波書店，1988年所収) 参照。
  - 20 坪谷善四郎『博文館五十年史』（博文館，1937年）25～26頁。
  - 21 前掲松井『四十五年間記者生活』37頁～38頁。ただし，那珂の『支那通史』は史料上の問題から元朝に入るところで止まっているから，元朝から清朝までを詳細に書いている『支那帝国史』が那珂の本の丸写しでなく，後半は別の参考書を使っていることは明白である。
  - 22 『日本百傑伝』第5巻末に，多忙と全6巻の計画が12巻に膨れ上がったため，第6巻以降を川崎に託す旨の松井の稟告（1892年12月付）が掲載される。
  - 23 『東亜先覚志士伝』は黒龍会創立30周年記念事業。川崎は史料提供者として凡例に名があり，下巻に序文を書く。同書上巻417頁～425頁参照。

- 24 協会機関紙は『東邦協会報告』（1891年5月創刊，月刊，1894年8月から『東邦協会会報』と改称）。創立会議は1890年11月5日。翌年91年7月7日第1回総会，この時，川崎は一般会員とし参加するも，評議員，編集担当から外れ，福本誠（日南）が編集幹事となる。
- 25 佐々木隆「第一次松方内閣期の新聞操縦問題」（『東京大学新聞研究所紀要』第31号，1983年）は，1891年11月18日の渡辺宛松方書簡（同日の経世に掲載の不穏当記事の取り消しと，厳しい監督を要請）を引用して，渡辺による経世監督の事実を明らかにした（63頁）。また大久保達正監修『松方正義関係文書』第11巻（大東文化大学東洋研究所，1990年）133頁～139頁を参照。
- 26 伊藤博文の政党組織問題と松方内閣に代わる伊藤内閣組織問題を巡る対立事件の中で，伊藤は枢密院議長を一旦辞職することになっていたが，宮中工作の結果3月11日明治天皇から慰留の宸翰を出してもらい体面を保った事件。この時，品川内相は選挙干渉の責任を取って辞職した。前掲佐々木論文，79頁～88頁。
- 27 酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』（東京大学出版会，1978年），小宮一夫「全国同志新聞雑誌記者同盟と明治27年前半の政局」（『メディア史研究』2号）参照。
- 28 『中央新聞』1894年12月21日「韓京所見・我日本人をして各道の地方官たらしむべし」，1895年3月14日「日本人韓地移植の急」。
- 29 『中央新聞』1894年9月11日の社告は，「千載一遇の大盛事大壯観を描すがために特に紫山川崎三郎氏を派出することに決し（中略）苟くも我が軍の到る処山海を跋涉し，朔漠を窮極するまで共に進むべし。紫山が雄渾淋漓の筆，特に大戦を描すに長ぜるは其著戊辰戦史，西南戦史及び世界百傑伝等に由て世に已に公評あり。雷を駆り電を撃するの快筆は，我が勇武絶倫なる軍隊が奔騰踊躍百万の敵を粉壺すると相待て，我中央新聞紙上当さに堅鏘の響きあらん」と述べ，川崎への期待感を強く示した。

本稿は平成19年度専修大学研究助成・個別研究「西南戦争の史料的研究」の研究成果の一部である。